# 独身主義と複合結婚が意味するもの
## ―シェイカー、オナイダ・コミュニティの禁欲主義とホーソーン

稲　垣　伸　一

19世紀アメリカにおいて、既存の結婚制度とは異なる男女関係に関する制度を採用した二つのグループがあった。一つがニューヨーク州中央部に建設されたオナイダ・コミュニティ、もう一つが「キリスト再臨信徒連合会（The United Society of Believers in Christ's Second Appearing）」、一般に「シェイカー」と呼ばれるキリスト教の一宗派で、その本拠地もニューヨーク州にあった。オナイダ・コミュニティは「複合結婚（complex marriage）」という一種の重婚制度を、シェイカーは複合結婚とは対照的に独身主義を採用して、既存の結婚制度に代わる男女関係のあり方を提示した。

この二つのグループが提示した新しい男女関係の制度・教義は、19世紀前半という時代的文脈の中に置いて考えることができる。シェイカーが多数のコミュニティを抱え不安定な時期から安定期に入ったのが1847年頃以降、オナイダ・コミュニティが成立したのが1848年で、その年にはアメリカ初の、女性の権利を求める大会がニューヨーク州セネカ・フォールズで開催されている。そしてもう一つ、大きなコミュニティ運動としてフーリエ主義に基づくコミュニティが多数建設されたのも1840年代で、トランセンデンタリストたちにより建設され、1844年にフーリエ主義に転向したブルック・ファームもその一つに数えられる。女性解放運動家たちはもちろん、フーリエ主義者たちも、結婚制度における男女関係の現状を批判し、ともに女性の経済的自立の必要性から女性の財産権を訴えた。女性大会が開催されたセネカ・フォールズはオナイダ・コミュニティが建設された町オナイダと比較的近いニューヨーク州中央部にあり、同じニューヨーク州

内にフーリエ主義のコミュニティも複数建設されたことから、シェイカーやオナイダ・コミュニティの女性をめぐる意識は、同時代同地域でのこれら別のグループの思想ともつながる。

また、オナイダ・コミュニティと一部のシェイカー・コミュニティも、ホイットニー・クロスが「焼き尽くされた地域（the Burned-Over District）」と呼んだニューヨーク州中央部から西部あるいはその近くにあるため、さらに大きな時代的文脈としては、この二つのグループは1820年代にピークを迎えるキリスト教信仰復興運動「第二の覚醒（the Second Great Awakening）」と関連しているとも言えるだろう。というのも第二の覚醒がニューヨーク州、特に西部における社会改革思想を受け入れる土壌を作ったとも言え、それがセネカ・フォールズやオナイダという地に女性解放運動やコミュニティ運動を起こさせたと考えられるからだ。そして、第二の覚醒の「余波（aftermath）」(285）とクロスが位置づけたスピリチュアリズム流行の発端「ロチェスター・ラッピング」が起こったのも1848年、場所はニューヨーク州西部ロチェスターだった。霊の住む調和した世界を現世にも実現しようと考えるスピリチュアリストたちは、女性解放運動とも深い関係にあった。要するに1830年代から40年代にかけてのニューヨーク州では、複数の要素が交錯して女性をめぐる問題が多くのグループに意識され、その動きの中にシェイカーやオナイダ・コミュニティも位置づけることができるということである。

本論では、こうした背景の中、南北戦争以前の時代に基礎を固めていったシェイカーとオナイダ・コミュニティのユートピア的そしてディストピア的性格の両方を指摘し、最後にナサニエル・ホーソーンの二つの短篇で描かれたシェイカーの両義的性格について考察する。

## 1. 結婚制度批判－独身主義と複合結婚

シェイカーという宗派は18世紀半ばイギリス、マンチェスター近郊で生まれ、成立後まもなく指導者の地位に就いたアン・リーと8人の信者

は1774年独立直前のアメリカに渡った。アン・リーに先導されたシェイカーは現在のニューヨーク州オルバニー近郊を拠点として（Foster, *Women* 22-23）、ニューイングランド地方、その後さらに広い地域で信者を獲得し、1850年代半ばには信者の数は約6,000人、約60のコミュニティが東はメイン州から西はインディアナ州まで広がった。その教義は信者以外の人間にも少なからず影響を与え、例えば後述するオナイダ・コミュニティのジョン・ハンフリー・ノイズ、そしてあのフリードリッヒ・エンゲルスにも影響を与えたと言われている（Foster, *Religion* 22-23）。

シェイカーを特徴づけるのは、まずその名の由来である特異な礼拝である。体を激しく「揺すり」(“shake” することから「シェイカー」と呼ばれるようになった)、叫び、飛び跳ね、歌い踊る、彼らの礼拝は外部の人々の関心を呼び、また疑念や敵対心も煽った。そしてシェイカーの教義上大きな特徴が独身主義で、その教義が拠って立つ信条は19世紀初めの信者によって以下のように記されている。

> As a gushing fountain is more powerful in its operations than an oozing spring; so that desire of carnal enjoyment, that mutually operates between male and female, is far more powerful than any other passion in human nature.
>
> . . . .
>
> Surely then, that must be the fountain head, the governing power, that shuts the eyes, stops the ears, and stupefies the sense to all other objects of time or eternity, and swallows up the whole man in its own peculiar enjoyment.
>
> And such is that feeling and affection, which is formed by the near relation and tie between the male and female; and which being corrupted by the subversion of the original law of God, converted that which in the beginning was pure and lovely, into the poison of the serpent; and the noblest affection of man, into the seat of human corruption. (Youngs 48-49)

要約すれば、男女の肉欲は他の何よりも強いものだが、引用最後の部分に

あるように、元々神が定めた男女の関係は「純粋で美しかった」とされ、しかしその関係は（肉欲的快楽に耽ることで)「人間の最も高貴な感情」を「人間の堕落の温床」へと変えてしまった、ということである。この考えから、シェイカーは性的欲望を満足させる結婚制度を否定して独身制度を採用した。彼らは外の社会で続く一夫一婦制の結婚制度とは相反する独身主義を維持しながら、イギリスからアメリカに渡って以来200年以上、複数のコミュニティを持つ集団として存続することになる。

シェイカーの独身主義とは対照的に､「複合結婚」と呼ばれる制度を採用したのがオナイダ・コミュニティだった。創始者ジョン・ハンフリー・ノイズの率いるグループは、1848年にヴァーモント州パトニーからニューヨーク州オナイダに移動してコミュニティを建設した。ノイズは独自のキリスト教信仰に基づいて、現世で採用されている結婚という制度が神の意志に反していると考える。

> When the will of God is done on earth, as it is in heaven, *there will be no marriage*. The marriage supper of the Lamb, is a feast at which *every dish is free to every guest*. . . . In a holy community, there is no more reason why sexual intercourse should be restrained by law, than why eating and drinking should be—and there is as little occasion for shame in the one case as in the other. (Noyes, “The Battle Axe Letter” 49)

神の意志によれば、結婚という制度がなくなると、ノイズは予言する。そして結婚（男女の関係）を子羊（キリスト）の饗宴に喩えるという独特の論法で､「男女の関係が法によって制限されることはない」と考え、複合結婚をコミュニティで制度化した。そして排他的な愛情で結ばれる一対一の結婚ではなく、複合結婚によって男女間の忠誠は個人からコミュニティのレベルに上がり、集団全体が「拡大された家族（enlarged family)」となることを目指した（Foster, *Religion* 107)。オナイダ・コミュニティの歴史はその前身が1830年代ヴァーモント州にあった時期も含めると40年を超える

ことになり、19世紀前半にアメリカで建設されたと言われる40余りのユートピア的生活共同体の中でも、それは最も長命の成功したコミュニティだった（Klaw 2）。

興味深いのは、複合結婚という一種の多重婚とも言える制度が無秩序な男女の結びつきを意味するかというと、決してそうではないということである。実際、複合結婚は、性交の際に男性の側に強い禁欲を要求する「男性の自制（male continence）」と呼ばれる方法によって実践された。「男性の自制」とは、「保留性交（coitus reservatus）」とも呼ばれ（Foster, *Women* 107）、男性の側に自己制御を求めて、性交の途中で射精しないようにすることを言う。ノイズは性交の目的を性愛と繁殖に分けて考えていて、これはイギリスのユートピア思想家ロバート・デイル・オーウェンの思想に影響を受けたものと考えられる。ここで確認しておきたいのは、オナイダ・コミュニティで実践された複合結婚とは、無秩序な男女の結びつきとはまったく異なり、非常に禁欲的だったということで、それは以下のノイズの『男性の自制』と題された文章に表れている。

> Nay, it is the glory of man to control himself, Heaven summons him to self-control in ALL THINGS. If it is noble and beautiful for the betrothed lover to respect the law of marriage in the midst of the glories of courtship, it may be even more noble and beautiful for the wedded lover to respect the laws of health and propagation in the midst of the ecstacies [*sic*] of sexual union. (Noyes, *Male Continence* 9-10)

「自己をコントロールすることに人間の栄光がある。天はすべてのことにおいて人に自己規制を要求する」とするノイズの思想からわかることは、複合結婚が禁欲的な思想あるいは信仰に基づいて実践された制度だったということである。ノイズの思想を考えると、シェイカーの独身主義同様、オナイダ・コミュニティの複合結婚も、実は禁欲主義的な態度を伴うものであることがわかる。そしてこの引用の中で、ノイズが「高貴で美しい」と

考える「健康と繁殖の法則を尊重すること」とは、出産に関わる女性の健康を意味しているということである。女性の健康についてのこの意識こそ、男女の関係について一見対照的な制度を採用したオナイダ・コミュニティとシェイカーの思想上の共通点と考えられる。

シェイカーの場合、独身主義は教祖的存在であるアン・リーの出産経験が始まりだった。彼女は苦痛を伴う4度の出産と、すべての子供の死を経験したために男女の性的な交わりを恐れるようになり、その直後にアダムとイヴの性交を幻視したと言われている。そしてこの性行為によりアダムとイヴは楽園を追放され、それが人間の堕落の起源だとアン・リーは確信して独身主義に至る（Foster, *Women* 22-23）。シェイカーたちはアン・リーの死後も彼女の思想を受け継ぎ、過剰な性欲という罪に対して神はイヴに罰を下し、その罰は後代の女性に受け継がれていると考え、男女関係を批判する。アン・リーの死後まとめられたシェイカーの思想で以下のような部分から、誤った男女関係によって女性のみに課された罰という認識が認められる。

> Thus the woman is not only subjected to the pains and sorrows of childbirth, but even in her conception, she becomes subject to the libidinous passions of her husband; and in this sense, her desire is subject to the will of her husband. This slavish subjection is often carried to such a shocking extent, that many females have suffered an unnatural and premature death, in consequence of the unseasonable and excessive indulgence of this passion in the man. (Green and Wells 132-33)

シェイカーが強調しているのは、出産時に女性のみが経験する苦痛だけではなく、夫の性的欲望の犠牲者として隷属的な地位に女性が置かれ、その結果多くの女性が若くして死に至っているということである。シェイカーはアダムとイヴの物語を、性欲の過剰による人間の堕落の象徴と解釈して、それを自分たちの生きる時代の隷属的男女関係と結びつけて考える。シェ

イカーは、カリスマ的指導者アン・リーの出産にまつわる個人的体験から、つまり女性の身体についての問題から出発して、聖書の物語を再解釈、そして独身主義に行き着いたのだった。

シェイカーの独身主義同様、オナイダ・コミュニティの複合結婚もつらい出産経験が始まりだった。こちらは創始者ジョン・ハンフリー・ノイズの妻ハリエットの経験で、彼女もシェイカーのアン・リーと同じように、6年間で5回の出産に苦しみ、そのうち4回は早産だったとノイズは告白している（Noyes, *Male Continence* 10）。その6年間とは1846年までのことで、その最後の1846年に複合結婚が初めて実践されている。ノイズが残した「バイブル・アーギュメント」という文章の一節によると、ノイズの問題意識も聖書から導き出される男女の関係にあったということがわかる。

> The chain of evils which holds humanity in ruin, has four links. viz -1st, a breach with God; (Gen. 3: 8;) 2d, a disruption of the sexes, involving a special curse on woman; (Gen. 3: 16;) 3d, the curse of oppressive labor, bearing specially on man; (Gen. 3: 17-19) 4th, Death. (Gen. 3: 22-24) These are all inextricably complicated with each other. The true scheme of redemption begins with reconciliation with God, proceeds first to a restoration of true relation between the sexes, then to a reform of the industrial system and ends with victory over death. (Noyes, “Bible Argument” 27-28)

ノイズの妻が経験したような出産の苦しみと死産は、この文章に記された「創世記」の箇所からも明らかなように、アダムとイヴの物語を参照して「神への背信」の結果与えられた「男女関係の崩壊」「女性への罰」として解釈される。そのためオナイダ・コミュニティが第一に目指したのは、「神との和解」、その次に「誠実な男女関係の回復」で、その結果採用された制度が、禁欲主義を内に含む複合結婚だったと考えられる（ノイズがここで言う「贖罪のための真の計画」で、「神との和解」「誠実な男女関係の回復」に続いて、この引用で言及されている「産業システムの改革」と「死に対する勝利」

とはどういうことを指しているのかについてはわからない)。

オナイダ・コミュニティで実践された複合結婚は、そこに至るまでの経緯がシェイカーの独身主義とよく似ている。それは、出産という女性の身体に関わる経験から出発して、聖書中のアダムとイヴの物語を解釈、その結果、複合結婚という実は禁欲的な制度に至るという道筋で、シェイカーとの違いは行き着いた制度だけだ。言い換えれば、シェイカーとオナイダ・コミュニティの違いは、男女の関係そのものを否定するか、誠実なということを大前提に、一種の産児制限の手段によって男女が一対一のカップルにこだわらず関係を持つかという点だけである。つまり複合結婚と独身主義との違いは、「実は単に『霊的』な愛情を何処で線引きするか」(高尾 111)という違いにすぎない。禁欲的に自己をコントロールすることについて、ローレンス・フォスターが言うように、オナイダ・コミュニティのノイズはシェイカーよりも男女関係の「先の地点で線を引いた」のであり、彼の理論は「シェイカーの異端信仰」だった(Foster, *Religion* 88, 95, *Women* 82)。したがって、両者は女性の出産に関わる問題を出発点として、同様の思考パターンから、南北戦争以前のアメリカ社会におけるセクシュアリティに関わる男女の関係を批判し、「女性にやさしい」共同体を目指したとひとまずは言えるだろう。

## 2. 統制による禁欲主義

シェイカーの独身主義と、「男性の自制」を前提とするオナイダ・コミュニティの複合結婚は、人間の本能的な性欲を抑制してはじめて可能になるという点では同じだった。そのため、これら禁欲的な制度を維持するにはメンバーを管理する手段が必要だったこと、言い換えれば、なんらかの強制力を働かせることが必要だったことは否定できない。そのため実際、「ディストピア」的とも言える側面がシェイカーにもオナイダ・コミュニティにもあった。

両方のグループに共通して言えることは、指導者がメンバーに対して権

威を確立し、その維持に腐心したということだ。次の文章はオナイダ・コミュニティの成立後1年が経過して、ジョン・ハンフリー・ノイズがコミュニティの性格を公に宣言したものだ。

> The kingdom of God is an absolute monarchy. It is a government not of compact between people and sovereign; not limited by constitutional forms and provisos. God takes the entire responsibility of the State; and the only compact in the case, is the very one-sided one called by the prophet the 'new covenant.' It is summed up in these words: - 'I *will* be to them a God and they *shall* be to me a people.' The 'patronage' and appointing power of course remain with the responsible party; and all forms of popular representation are dispensed with. (Noyes, *First Annual Report* 12)

冒頭の「神の王国」は、ノイズがこの引用の少し前でオナイダ・コミュニティは神の王国の一支部であるとことわっているので、オナイダ・コミュニティと置き換えられる。したがって、神の王国たるオナイダ・コミュニティは「臣民と君主との誓約で成り立つのではない政体」であるとここでノイズは言い切り、「私が彼らにとっての神となり、彼らは私にとって臣民となる」また「人々の代表からなるすべての組織は不要である」とまで言っている。コミュニティに対するノイズのこの考え方は、近代的な民主主義の考え方とは対照的である。そのため、複合結婚という制度では男性に強い自己抑制を求め、日常の仕事の分担でも男女のステレオタイプにとらわれなかったコミュニティと、これが同じコミュニティの説明かと疑いたくなるほど、ノイズによるこの考えはユートピア的コミュニティの説明としては権威主義的で非民主的に響く。しかし逆説的だが、父権的な、神にも近い権威をメンバーに認められてはじめて、ノイズはその権威によって外の社会とは違った男女の新しい関係を築くことが可能になったというのが、オナイダ・コミュニティの特徴でもあった（Mandelker 19, 54, 56, Foster, *Religion* 106）。

他方、シェイカーも同様に、厳格なヒエラルヒーによる厳しい統制に

よってその秩序が保たれていた。本拠地ニューヨーク州ニューレバノンに居住した男女二人ずつから成る最高指導者を筆頭に、各コミュニティは最高指導者から指名されたこれも男女二人ずつの指導者の下に運営された。コミュニティはさらに30－100人の「ファミリー」と呼ばれるさらに小さな単位に分けられ、男女同数を理想としたリーダーたちの統制の下にメンバーは生活した。つまりシェイカーという集団は、最高指導者から最小単位のファミリーをまとめるリーダーまで、あらゆるレベルで男女が平等に責任を負っており、ジェンダーの区別を超えたリーダーシップという意味ではリベラルな特徴を持っていた（Foster, *Women* 30）。しかしその反面、この統治システムでは、寡頭制による各階層のリーダーが厳しくメンバーの生活を監視していたがゆえに、地理的に広範囲に点在する多数のシェイカー・コミュニティをまとめることが可能だったとも言える。

シェイカーとオナイダ・コミュニティの厳しい統制、いわばダークな側面は例えば、奇しくも両グループに見られた育児の方法とその後の若者の反応に現れている。シェイカーのコミュニティでは新しいメンバーが子供を伴って加わった場合、乳離れ後の子供は親とは別れて、指導者から指名されたメンバーに育てられた。同じようにオナイダ・コミュニティでも、子連れでメンバーが加入するか、メンバーが出産すると、子供の乳離れ後は他のメンバーによって育てられた。子を実の親と離して養育するという、シェイカーとオナイダ・コミュニティが実践した制度の第一の目的は、おそらくコミュニティの将来を担えるメンバーの養成だった。しかし実の親子、特に子と母親との別れはつらいものだったことはまちがいなく、その結果、両方のコミュニティで育った若者は思春期を迎え反発するようになった。

オナイダ・コミュニティでは、別れて暮らす母子が決められた機会に会うことはできたが、母子間で強すぎる執着が見られると二人はその罪を悔い改めるために、一定期間会うことを禁じられた。このような環境で育てられた子供は、親たちが持つ強い宗教心を自分が大人になっても持たない傾向があった（Foster, *Religion* 238-39）。また、オナイダ・コミュニティで

行われた若いメンバーの育成については、管理主義ここに極まると言えるような歪んだ慣習が、複合結婚の実践の中に見られた。それは10，20代の若者が年配のメンバーとカプリングされたことである。若者はより「霊的である（spiritual）」と認められた実際には年配のメンバーと結ばれる傾向にあり（Foster, *Religion* 106）、若い男性は閉経後の女性メンバーによって「男性の自制」へと誘導され、若い女性も年配の男性メンバーによって複合結婚という制度に迎え入れられた（Foster, *Women* 83）。多重婚の制度を実践した割に、オナイダ・コミュニティでは計画外の妊娠が極端に少なかったことが報告されているが（Foster, *Women* 82-83, 262）、それはこうした年齢差のあるカプリングに因るところも大きく、こうした組織の慣習によって若者は複合結婚の裏にある禁欲的な精神を育まれてきたと想像できる。

シェイカーのコミュニティでも実の親と離された子育てや独身主義は、若者に暗い影を落とした。いくら集団への忠誠心を植え付けられたとしても、思春期を迎えた子供が性欲を抑え、統制の厳しいコミュニティの生活に耐えるのは難しかったようだ。結果、若者たちはしばしば権威に対して憎しみを抱き、自由を厳しく制限する規則に反発した。それに対して指導者たちは祈りや説得を含む厳しい道徳的勧告で反発する若者を留まらせようとしたが、結果としてシェイカーのコミュニティで育った多くの若者たちはそこを去っていったという（Foster, *Religion* 61, 238）。

## 3．ホーソーンが描くシェイカー

こうしたシェイカーの共同体あるいはその教義に対する若いメンバーの反発を描いたのが、ナサニエル・ホーソーンの “The Canterbury Pilgrims”（1832）と “The Shaker Bridal”（1837）である。冒頭で確認したように、シェイカーとオナイダ・コミュニティは、セネカ・フォールズ女性大会で女性の財産権を主張して既存の結婚制度を批判した女性解放運動、そして結婚制度を否定する思想も持っていたフーリエ主義者やスピリチュアリストとも共鳴して、南北戦争以前の時代に見られた女性解放のイデオロギーを共

有していたと考えられる。しかしその反面、両者とも強い統制によって禁欲的な教義に基づくコミュニティを維持するという側面も持っていたこともすでに指摘した。こうした二面性のためだろうか、同時代を生きたホーソーンはシェイカーについて両義的な見方をしていたようである。

ホーソーンは1831年ニューハンプシャー州カンタベリーにあるシェイカーのコミュニティを訪ね、彼らが快適な生活を送っていて、「自分が言葉を交わしたコミュニティのメンバーは知的で幸せそうに見えた」と、姉のルイーザに宛てた書簡で語っている。フーリエ主義との関係からホーソーン作品を読み直すアンドリュー・ローマンは、この訪問時のシェイカーに対する好印象が、10年後ホーソーンがブルック・ファームに参加することへとつながった可能性さえ示唆している（Loman 35）。しかし現実のシェイカーに対するホーソーンの好印象とは対照的に、シェイカーを描いた「カンタベリー巡礼」と「シェイカー教徒の結婚式」では、シェイカーの教義に対する若いメンバーの反発を描いている。

「シェイカー教徒の結婚式」では、あるコミュニティを長年治めてきた長老が若い男女AdamとMarthaに指導者の座を譲ることになり、指導者に指名されたマーサはシェイカーの教義に懐疑的なため指名を受け入れることを躊躇して、長老たちは彼女の視点から批判的に描かれる。

> They had overcome their natural sympathy with human frailties and affections. One, when he joined the Society, had brought with him his wife and children, but never, from that hour, had spoken a fond word to the former, or taken his best-loved child upon his knee. . . . The youngest of the elders, a man of about fifty, had been bred from infancy in a Shaker village, and was said never to have clasped a woman's hand in his own, and to have no conception of a closer tie than the cold fraternal one of the sect. (Hawthorne, "The Shaker Bridal" 424)

まずこの冒頭で彼らシェイカーの長老たちが人間の弱さや感情に対する

「自然な共感」をすでに「克服してしまった」として、その教義に忠実であることの不自然さが暗示される。そしてその不自然さを例証するかのように、ある長老はシェイカーのコミュニティに入って以来「妻に優しい言葉をかけたこともなく、最愛の子供を膝に抱いたこともなく」、また別の長老は「女性の手を握ったこともない」と語られ、独身主義が批判される。ここではシェイカーの教義を受け入れることをためらうマーサの視点から、シェイカーの男性長老たちの生き方に対する違和感、独身主義が人間性を歪めてしまうという批判的な見解が示されている。

もう一つの短篇「カンタベリー巡礼」では、互いに愛し合うようになりシェイカーの村（おそらくニューハンプシャー州カンタベリー）を出てきたばかりの若い男女JosiahとMiriamが、二人とは逆に、一般社会で挫折を味わい救いを求めてシェイカーの村を目指す詩人・商人・農夫から成る旅人たちと出会う姿を描いている。そこでもシェイカーの村を出たジョサイアは出会ったグループに、長老の厳格さを訴える。

> ‘Yet you think it expedient to depart without leave taking,’ remarked one of the travelers.
>
> ‘Yea, ye-a,’ said Josiah, reluctantly, ‘because father Job is a very awful man to speak with, and being aged himself, he has but little charity for what he calls the iniquities of the flesh.’ (Hawthorne, “The Canterbury Pilgrims” 122)

「肉体の邪悪（the iniquities of the flesh）」とはおそらく男女の肉体関係を指すものと思われる。ジョブというシェイカーの長老はそれに対して寛容さを示さないとジョサイアは言う。独身主義を守ろうとする厳格な長老に対する若いメンバーの批判は、「シェイカー教徒の結婚式」の先の引用と同様だ。

しかし「カンタベリー巡礼」では、シェイカーのコミュニティを目指す旅人たちの見解は若い男女とは当然違い、ここでシェイカーの厳格さに反発するジョサイアとミリアムの考えを相対化していると解釈できる。旅人

たちはそれぞれに若い男女を引き留めようと外の社会の生きにくさを語り、例えばそのうちの一人、農夫の妻は破綻しかけた結婚生活について次のように語る。

> If you and your sweet heart marry, you'll be kind and pleasant to each other for a year or two, and while that's the case, you never will repent; but by-and-by, he'll grow gloomy, rough, and hard to please, and you'll be peevish, and full of little angry fits, and apt to be complaining by the fireside, when he comes to rest himself from his troubles out of doors; so your love will wear away by little and little, and leave you miserable at last. (Hawthorne, "The Canterbury Pilgrims" 130)

ここで語られるのは、結婚当初夫婦関係はうまくいっても、1，2年もすれば二人の関係は悪くなる一方だという身も蓋もない意見だが、こうした言説はこの小説が書かれた1830年代より下って1850年代に論じられることになる結婚制度批判と同質である。もし19世紀半ば以降であればフリー・ラヴ思想とレッテルを貼られたであろうこの言葉のすぐ後で、この農夫の夫婦は以下のように描かれる。

> As she ceased, the yeoman and his wife exchanged a glance, in which there was more and warmer affection than they had supposed to have escaped the frost of a wintry fate, in either of their breasts. (Hawthorne, "The Canterbury Pilgrims" 130)

この農夫の夫婦は「冬のように過酷な運命から逃れたと二人が思った以上に大きな暖かい愛情をたたえた視線を交わし」一旦破綻しかけた関係が今修復されたことを示す。つまり結婚生活を棄て、シェイカーのコミュニティに加わることを決めたことにより、二人の愛情は再燃したという解釈がこの部分からは可能なのではないだろうか。そうだとするなら、独身主義を

採用するシェイカーのコミュニティが、こと男女の関係に関してはディストピア転じてユートピアになりうる可能性を示しているとも考えられる。

「カンタベリー巡礼」はこのように、シェイカーを否定的に描きながら、実はその見方を相対化するかのような両義的な解釈が可能なように描いている。同様の読み方が可能な場面は他にもある。旅人たちが繰り返し村に戻るよう若い男女を説得するにもかかわらず、若い男女がその説得を拒否して旅人たちを見送る場面でこの短篇は終わる。その終わりでシェイカーの村は、村を去ったジョサイアとミリアムに近い視点から次のように描かれる。

> They [the Canterbury Pilgrims] sought a home where all former ties of nature or society would be sundered, and all old distinctions levelled, and a cold and passionless security be substituted for human hope and fear, as in that other refuge of the world's weary outcasts, the grave. (Hawthorne, "The Canterbury Pilgrims" 131)

出てきた若者にとってシェイカーのコミュニティは、「墓場」に喩えられる。しかしこの一見ディストピア的なイメージで語られるシェイカーのコミュニティの描写は、別様に解釈される可能性を孕んでいる。この小説でシェイカーのコミュニティに向かう旅人のうち少なくとも詩人と商人の二人は、名声を得ようと奮闘して失敗した結果、シェイカーに改宗しようと考えた経緯が先に明らかにされている。「（人間の）すべての古い差異が平準化された（all old distinctions levelled）」世界であるシェイカーのコミュニティには、俗世間に存在する「希望」も「恐怖」もない代わりに「冷たく感情をなくした安心（a cold and passionless security）」が存在する。たとえ「冷たく」、「感情をなくした」ものであってもその「安心」こそが、名声や経済的成功を目指して挫折した詩人や商人たち巡礼者が求めたもので、それが存在するコミュニティは彼らにとってユートピアということになる。この語りの撞着的な説明がまさにシェイカーの現実を体現しているのではな

いだろうか。

ホーソーンはシェイカー・コミュニティを訪ねた自身の体験も踏まえて、特に「カンタベリー巡礼」では、ユートピアとディストピアとしてのシェイカーの両面を相対化しているように思える。世俗的・経済的挫折が理由で巡礼者たちがシェイカー社会に参加することは、結婚制度より大きなコンテクストから考えれば、近代産業主義の負の側面を描いているとも言えるだろう。つまりこの短篇ではディストピア的コミュニティを描きつつ、第二の覚醒の影響を受けた社会改革のユートピア的ヴィジョンが盛り込まれているとも言え、1832年に発表されたこの短篇は、シェイカー・コミュニティの相矛盾する二つの側面を描くだけでなく、同じ1830年代にその前身が創設され1848年にニューヨーク州に移ることになるオナイダ・コミュニティの、これもまた二つの側面を持つ姿を結果的に予見することになったとも言える。

複合結婚にしても独身主義にしても、男女関係のあり方としては両極端な二つの制度であることから、オナイダ・コミュニティもシェイカーもその生活を詳細に検討すれば、先に述べたようにディストピア的要素が見られることは確かである。しかしその一方で、ホーソーンが描くシェイカーのコミュニティから読み取ることのできる両面性は、19世紀アメリカ社会に生きた人々の両コミュニティについての反応を表していると考えられる。なぜなら、シェイカーそしてオナイダ・コミュニティも常軌を逸したとも考えられる教義の中に、一般社会に存在する矛盾を改革する要素を含んでおり、それに共感を示す人々が存在したこともまた事実だからである。だからこそ、一般社会から批判や揶揄を受けながらもオナイダ・コミュニティは、19世紀半ばに建設されたユートピア的生活共同体の中でも例外的に長命を誇った。シェイカーについては19世紀どころか少なくとも20世紀末の1991年時点でニューハンプシャー州カンタベリーとメイン州サバスデイ・レイクに二つのコミュニティが残り（Stein 436）、そのうち後者は21世紀の現在も複数の信徒によって維持されていることが、このコミュニティのウェブサイト（http://maineshakers.com/daily-life）で確認できる。こうし

た長命なコミュニティの存在を確認すると、シェイカーとオナイダ・コミュニティが男女関係についてエキセントリックな制度を持ちながらも長きに渡って存続してきた理由の一端を、シェイカーを描いたホーソーンの短篇は暗示しているように思えるのである。

## 引用文献


Cross, Whitney R. *The Burned-Over District: The Social and Intellectual History of Enthusiastic Religion in Western New York, 1800-1850*. Ithaca: Cornell UP, 1950. Print.

Foster, Lawrence. *Religion and Sexuality: The Shakers, the Mormons, and the Oneida Community*. Urbana: U of Illinois P, 1981. Print.

---. *Women, Family, and Utopia: Communal Experiments of the Shakers, the Oneida Community, and the Mormons*. Syracuse: Syracuse UP, 1991. Print.

Green, Calvin and Seth Y. Wells. *A Summary View of the Millennial Church or United Society of Believers (Commonly Called Shakers)*. Albany: Packard & Van Benthuysen, 1823. Hathi Trust Digital Library. Web. 18 Sep. 2013.

Hawthorne, Nathaniel. "The Canterbury Pilgrims." 1832. *The Snow Image and Uncollected Tales*. Vol. 11 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Eds. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1974. 120-31. Print.

---. "The Shaker Bridal." 1837. *Twice-Told Tales*. Vol. 9 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Eds. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1974. 419-25. Print.

Klaw, Spencer. *Without Sin: The Life and Death of the Oneida Community*. New York: Penguin. 1993. Print.

Loman, Andrew. *"Somewhat on the Community-System: Fourierism in the Works of Nathaniel Hawthorne*. New York: Routledge, 2005. Print.

Mandelker, Ira L. *Religion, Society, and Utopia in Nineteenth-Century America*. Amherst, U of Massachusetts P, 1984. Print.

Noyes, John Humphrey. "The Battle Axe Letter" *The Witness* 23 Jan. 1839: 49-51. Print.

---. "Bible Argument," *First Annual Report of the Oneida Association*, 1849.

---. *First Annual Report of the Oneida Association*, 1849. *Oneida Community Collection*, Syracuse University Library. Web. 3 July 2013.

---. *Male Continence*. 1872. *Oneida Community Collection*, Syracuse University Library.

Web. 23 Aug. 2013.

Stein, Stephen J. *The Shaker Experience in America: A History of the United Society of Believers*. New Haven: Yale UP, 1992. Print.

Youngs, Benjamin Seth. *The Testimony of Christ's Second Appearing: Containing a General Statement of All Things Pertaining to the Faith and Practice of the Church of God in This Latter Day*. 2nd Ed. Albany: E. and E. Hosford, 1810. Hathi Trust Digital Library. Web. 14 March 2014.

高尾直知「家庭崩壊の美学－ホーソーンと宗教共同体的家庭改革」、『ホーソーンの軌跡－生誕二百年記念論集』川窪啓資編、東京：開文社、2005年、97-117頁。

本稿は、2014年6月21日に行われた日本英文学会関東支部夏季大会シンポジウム「ユートピア／ディストピア再考－歴史、ジェンダー、共同体」での口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。